

明治期(1868-1912)日本におけるフレーベル主義幼稚園受容の特徴  
—フレーベル主義幼稚園導入の先駆者を中心として—

小 笠 原 道 雄\*

A Study on the Reception of Fröbel's "Kindergarten" in the Meiji-Period (1868-1912) in Japan  
—In Consideration of Fröbelische Kindergarten's Pioneers in the Meiji-Earl Years—

Zur Fröbel-Rezeption in Japan in der Meiji-Aera (1868-1912)—Die Einführung der  
Leitende Pioniere für die fröbelistische Kindergarten in die erste Periode—

Michio Ogasawara

Im November 1876 (Meiji 9) wurde der angegliederte Kindergarten von Tokyo Lehrerbildungsschule für Frauen gegründet. Das war der richtige Anfang der Kindergartenerziehung in Japan. Das war etwa 30 Jahre nach der Gründung des ersten Kindergartens von Fröbel, nur drei Jahre später als die Gründung des öffentlichen Kindergartens in den Vereinigten Staaten. Das heisst: Auch in Japan wurde nach der Meiji-Restauration ziemlich früh der Kindergarten eingerichtet. Die Einführung der Kindergartenerziehung nach dem Modell des Fröbelischen Kindergartens vom Westen bedeutete allerdings für Japaner die Rezeption einer völlig fremde Kultur. Deshalb brauchte man viel Zeit und Mühe, um dieses Modell zu verstehen und das im Boden der japanischen Kultur einbürgern zu lassen. Die Zehner Jahre von Meiji (1877-1886) waren die Periode, in der man nach dem Ziel und der Form der Kindergartenerziehung suchte. Dabei beschäftigten sich die Leute mit der Frage, wie man die Kindergartenerziehung als vom Westen eingeführte fremde Kultur ins reale Leben der Japaner einbürgern kann und soll. Durch diese mühsamen Prozesse verbreitete sich die Kindergartenerziehung im modernen Japan. Im folgenden Teil werde ich die Rezeptionsprozesse der Information über Fröbelische Kindergartenerziehung betrachten. Dabei wird die Auseinandersetzung mit den Leitende Pioniere für die fröbelistische Kindergarten im Mittelpunkt der Betrachtung stehen.

- 1) Die Rezeption der Informationen über Fröbel-Kindergarten
- 2) Die Rezeption der Informationen über Kindergartenerziehung durch ausländische Literatur
- 3) Leitende Personen (Pioniere Personen) für die fröbelistische Kindergarten

キーワード

フリードリヒ・フレーベル Friedrich Fröbel, 幼稚園 Kindergarten, 明治期 (1868-1912) Meiji-Period (1868-1912), 中村正直 (Nakamura Masanao 1832-1891), 関 信三 (Seki Shinzou 1843-79), 松野クララ (Matsuno Clara geb. Zitermann 1853-1931), アニー・ライオン・ハウ (Annie Lion Howe (1852-1943))

わが国における二つの幼稚園観の起源：

「幼稚園ノ課業ハ畢竟小学校ノ遊戯ナルヲ以テ遊戯学校ト称スルモ亦可ナリ」

(キンダーガルトンの説, 「米国教育寮年報抄訳」1874 (明治7)年12月28日『文部省雑誌』より)

「善良ナル親族ノ自家教育ニ模擬シ, 務メテ学校ノ方法ニ倣ハザルヲ可」

(「ドゥアイ氏幼稚園論ノ概旨」(中村正直訳稿, 1876 (明治9)年5月15日『教育雑誌』(1876年『文部省雑誌』改名)より)

所属

\*広島文化学園大学 学芸学部 子ども学科 Hiroshima Bunka Gakuen University Faculty of Arts and Sciences Department of Childhood Studies

## はじめに

1876（明治9）年11月、東京女子師範学校に附属幼稚園が創設され、日本の幼稚園教育は本格的にスタートした。それはフリードリヒ・フレーベル（Friedrich Fröbel, 1782-1852）によるキンダーガルテン創設から36年後のことであり、アメリカにおける公立幼稚園開設からわずか3年遅れてのことであった。従って、わが国でも明治維新後、かなり早い時期に幼稚園の設置がなされたのであった。しかし、欧米のフレーベル主義幼稚園をモデルとした幼稚園教育の導入は、当時の日本人にとって異文化そのものであり、それを理解し日本の土壌に定着させるためには多くの時間と方策を要した。明治10年代（1877-1886）は、導入された異文化としての幼稚園教育を日本人の現実の生活のなかにいかにして根付かせるのか、その目的やあり方について模倣・模索された時期でもあり、そうした過程を経て、幼稚園教育は徐々に普及し、近代日本における幼稚園教育の基本的形態が形成されていったと考えられる。

以下、本稿では、広島文化学園大学学芸学部紀要第5号（2015）での「明治期（1868-1912）日本におけるフレーベル主義幼稚園受容の研究—教育雑誌『文部省雑誌』並びに翻訳書を通じての考察—（1）」の続編として、「フレーベル主義幼稚園教育の受容の特徴」のタイトルで、明治期フレーベル式幼稚園受容にかかわる先覚者として重要な四人、すなわち、中村正直（1832-1891）、関信三（1843-79）、松野クララ（旧姓チイテルマン）（(MATSUNO, Clara (geb. Zitelmann)) (1853-1931)、ハウ・アニー・ライオン（Howe Annie Lyon）（1852-1943）を中心に考察する。四者は明治期の国立、公立並びに私立幼稚園の成立やその展開に決定的役割を果たした人物だからである。

ただし、これらの導入の前段としての幼稚園に関する「海外の教育情報」として、紀要論文第5号の論稿：I. 文部省刊行教育雑誌による

幼稚園情報、II. 外国文献による幼稚園教育情報を要約して再掲する。

（ここでは、今回付録（Anhang）として明治初期、幼稚園に関する外国文献の紹介として国立国会図書館所蔵の文献と筑波大学図書館（旧東京女子師範学校の文献を収納している施設）の文献を一覧表に英文でまとめ26冊を表示し、論文末尾に掲載した。参考・引用文献としては、湯川嘉津美著『日本幼稚園成立史の研究』風間書房、2001、160-161頁を一部変更して引用した。）

なおその際、関信三、松野クララに関しては、先行研究として石橋哲成の『フレーベル教育思想の日本への受容（Art und Weise der Rezeption der Erziehungsgedanken Fröbels in Japan）（増補版）』（2011）を、外国人教師、宣教師 A.L.ハウに関しては、ロベルタ・ウォロンズ（Wollons, Roberta）論「アニー・ライオン・ハウと宣教師による幼稚園」；所収：同志社大学人文科学研究所編『来日アメリカ宣教師—アメリカン・ボード宣教師書簡の研究 1869～1890—』現代資料出版、（1999）を参照しながら課題の究明を図る。人名表記に関しては、日本ペスタロッター・フレーベル学会編増補改訂版『ペスタロッター・フレーベル事典』玉川大学出版部、2006刊に原則従った。また、今回ベルリン・フンボルト大学と付設森鷗外記念館（Mori-Ogai-Gedenkstätte）共催の「子どものパラダイス—1900年頃の日本の子どもへの西欧のまなざし—」（開会講演（2016.10.19.）に招待されたポスターを「写真①」として掲載した。当時の西欧人が抱く日本の子どもに対するイメージを表出していると考えられるからである。また、主催者側から東京女子師範学校発足時の松野クララのクラス写真1葉（著作権：Bernd Lepach）が示された。極めて貴重な写真で二人の日本人保姆（富田英雄と近藤浜と思われる）と外国人2名の子どもを含む31名の写真である。それを写真③として掲載した。

## I. 日本におけるフレーベル主義幼稚園教育の受容

従来から日本におけるフレーベル研究では、日本の幼稚園は欧米のフレーベル主義幼稚園、とりわけアメリカの幼稚園をモデルにして出発したとされている。当時翻訳された幼稚園書のほとんどがアメリカで定評ある幼稚園書であったというのがその理由である。しかしその根拠に対しては湯川が指摘するように、明治初期に日本に輸入された諸外国の幼稚園に関する書物についての総合的な調査と分析が、必要と考えられる。とりわけ、フレーベル主義幼稚園教育の在り方が、どのような文献を通じて日本に紹介され、受容されたかを外国文献と日本側の資料との比較検討によって実証的に明らかにされることが必要である。

以下、実証的な精査の一例として、明治初期に刊行された教育雑誌の分析を行う。

### 1) 文部省刊行教育雑誌による幼稚園情報

文部省は1873（明治6）年から『文部省雑誌』を刊行し、各種の教育情報を提供したが、翌年からは海外教育雑誌、教育書の抄訳等を掲載するに至り、1876年に『教育雑誌』と雑誌名を変更するとともに海外の教育情報を紹介する情報誌となった。とりわけ1876年から1879年にかけてのこの期間は、わが国の幼稚園創設とかかわって海外の幼稚園情報が数多く紹介され、実践の参考に供された。

これらの内容は、外国の幼稚園の状況、幼稚園論、さらには保育方法論と多岐にわたる。国別ではアメリカの情報が多いが、ドイツ、イギリス、フランスの情報も取り上げられており、一般に言われる程アメリカ一辺倒ではない情報の収集がみられる点に注目する必要がある。

このようにわが国の幼稚園はアメリカのフレーベル主義幼稚園をモデルとして出発したとされるが、同時に上述のようなドイツの幼稚園情報も紹介されており、それは日本人に幼稚園に対する二種類のイメージを提供することになった。この点はその後のわが国の幼稚園を考える上で極めて重要である。冒頭のわが国における二つの幼稚園観の起源を参照されたい。

以上のように、文部省刊行教育雑誌には1871年以降、西洋の幼児教育の情報が次々に掲載され、外国の幼稚園の状況から保育実践に関わる

論まで翻訳・紹介された。全国的規模でのこうした幼稚園教育の紹介は、幼稚園関係者のみならず、広く人々に幼稚園教育の意義や内容・方法を知らせた。幼稚園に関する文献の少なかった当時、これらの幼稚園記事は幼稚園を設立しようとする者にとって、貴重な情報源となったであろうことは疑いえない。なかでも創設期の幼稚園教育に多大な影響を与えたと推察される「幼稚園ノ説」及び中村正直の幼稚園論紹介は重要である。

## II. 外国文献による幼稚園教育情報の受容

湯川の研究によれば、従来の研究では1876（明治9）年に創設された附属幼稚園が、どのような経路で導入され、また当時の幼稚園関係者がそれをいかに理解したかについての体系的をもった歴史的＝実証的な考察はなお十分とはいえないと判断されている。

一般に幼児教育の方法に関しては、明治・大正期の幼稚園教育がアメリカで実施されていたフレーベル主義（式）幼稚園を規準に輸入され進展したとされ、田中不二麿、中村正直、関信三、A.L.ハウ（How, Annie Lyon 1852-1943）らを中心に説明がなされるが、これらの人々が実際に参考とした外国の幼稚園書の精査が不完全なままなのである。ここでは湯川の実証的な研究に依拠しながら、明治初期の幼稚園教育の導入について、いかなる幼稚園教育情報が紹介され、それを当時の幼稚園関係者（担い手）にどのように受容されていったかについて、保育の参考とされた外国の幼稚園書の分析を通じて検討する必要がある。（本稿の末尾に掲載した「付録（Anfang）：Die Einführung auslaendischer Literatur ueber den Kindergarten in die erste Meiji-Periode（明治初期の幼稚園に関する外国文献の紹介）」を参照のこと。）

## III. 明治初期フレーベル主義幼稚園導入時の先駆者達

### 1. 国立東京女子師範学校附属幼稚園（現お茶の水女子大学附属幼稚園）

1) 中村正直（国立東京女子師範学校執事（校長）、1832-1891）：中村はフレーベル主義幼稚園を知るため、アドルフ・ドゥアイ（Douai, Adolf 1819-88、ドイツの社会主義的教育者でドイツから1852年北アメリカ

に移住、ニュージャージー州にジャーマン・イングリッシュ・アカデミーを創設、校長を務め、その学校に幼稚園を付設し、フレーベル式の幼稚園教育を導入した)の英文で書かれた“Kindergarten”を『文部省雑誌』で紹介したり、さらにはイギリスの教育者 J. Payner (1808-1876) の書物を翻訳紹介している。

- 2) 関 信三 (東京女子師範学校附属幼稚園初代監事 (園長), 1843-1878) : 関は広くフレーベルの思想と実践を日本に導入した最も重要な先駆者である。彼は、A. ドゥアイの『幼稚園記』(1876/77) を翻訳し、『幼稚園設立法』(1878) を書き、その中で、いかに幼稚園を設立し運営するかを説明している。関は英語に堪能で、通訳者として大きな役割を担っていた。元来、関は仏教徒であった関係でフレーベルの遊具 (Gabe ; ガーベ = 神からの贈り物) を〈恩物 = おんぶつ〉と訳語を付した。また、幼稚園で遊ぶための〈20遊具〉を「幼稚園法二十遊戯」として編纂した。それらは、フレーベルの「遊具 = 教育遊具 (Spielzeug)」の「恩物 (Gabe)」と「作業具 (Beschäftigungsmitteln)」を一緒にしたもので、わが国においては「20恩物」の名称で流布し、現在でも誤って一般にこのような『遊具』の理解がなされている。
- 3) 松野クララ ((geb. Zitelmann 1853-1931) 附属初代幼稚園主任) : ドイツ人クララは当初、東京女子師範学校の英語教師として働いていたが、ドイツでフレーベルによって創設された幼稚園保姆養成施設で訓練を受けたキャリアを買われ、初代附属幼稚園主任に招聘された。ドイツで当時プロイセンのエーベルスヴァルトの高等農林学校で森林科学を学ぶために旧農林・商務省から派遣された留学生、松野<sup>はざま</sup>と知り合い、結婚、1875年来日した。クララは一子 (娘 (ふみ)) を育て、1881年附属幼稚園で勤務した後、1886年以降は華族女学校 (現学習院高等女学校) の音楽教師として勤務、1901年娘フミの死亡、1908年松野<sup>はざま</sup>の逝去後、二人の孫をつれた帰独した。1931年、クララはベルリン近郊の Wilmersdorf で死亡。なお、クララの生涯については不明な点が多い。

## 2. 私立幼稚園の先駆者：アニー・ライオン・ハウの思想と実践

### —外国人宣教師によるフレーベル思想の伝播—

明治以降多くの外国人 (特に婦人宣教師) たちによって幼稚園や託児所など幼児保育施設が開設され、それらの施設の運営を通してフレーベルの保育思想や児童救済の思想が紹介され、実践された。それら多くの外国人や宣教師たちの中でも、特に、明治期にフレーベル主義 (式) 幼稚園の普及と実践活動を展開した代表的人物としてアニー・ライオン・ハウ (Howe, Annie, Lyon, 1852-1943) を挙げることができる。

A.L.ハウに関する最近の先行研究としては、

1. 石橋哲成論「日本のキリスト教幼稚園にみるフレーベル教育思想の受容—1880年代におけるを中心に—」のⅢ. A.L.ハウによる頌榮幼稚園の創設とフレーベル教育思想の受容、所収；『フレーベル教育思想の日本への受容』(増補版) 2012. 玉川学園 DTP 制作課。
2. 西垣光代著『主に望みをおいて—日本の幼児教育に貢献したアニー L.ハウ』キリスト新聞社、2014。
3. その他として、水野浩志・岩崎次男論「フレーベル研究史 (日本)」, 所収；日本ペスタロッター・フレーベル学会編『増補改訂版ペスタロッター・フレーベル事典』玉川大学出版部、2006. 等がある。

\*2002年9月21日、私信として送られたきた水野浩志からの資料 (パンフレット) からは「ハウはキリスト教保育会の導きの星として—(略)—非常に高く評価されてきたが、一般の日本幼児保育史上においては無視されて来たとも言える。」とし、ハウの業績について書かれた初期の著作・論文として以下の著作をあげている。

1. キリスト教保育連盟編『日本キリスト教幼稚園史』昭和16年。
2. 頌榮保育学院編『頌榮とハウ先生』(頌榮60周年記念誌) 昭和24年。
3. 日本保育学会編『日本幼児保育史』第二巻、昭和43年。
4. 津守・久保・本田著『幼稚園の歴史』昭和34年。
5. キリスト教保育連盟編『日本キリスト教保育80年史』昭和41年。
6. 岡田・宍戸・水野編『保育に生きた人々』昭和46年。
7. 高野勝夫著『エ・エル・ハウ女史と頌榮の歩み』昭和48年。(以下省略と水野は書いている)

以下水野のパンフレットから、I. 日本側の資料からみたハウによるフレーベル文献及び関

連文献の翻訳と著作活動について列記する。

その上で、Ⅱ. アメリカの「宣教師による幼稚園」の考察を行ったロベルタ・ウォロンズ (Roberta Wollons) の論文「アニー・ライオン・ハウと宣教師による幼稚園」を中心にハウの思想と行動を考察する。

### I. 日本側の資料からみたハウの諸活動

1. ハウ著『保育学初歩』明治26（1893）年12月、福音社刊行。ハウの保姆伝習所生徒への講義をまとめたものでフレーベルの恩物の理論とその取り扱い方法並びに手芸や指導方法を平易に解説している。付録としてフレーベル抄伝が記されている。

2. フレーベル著ハウ訳『母の遊戯及育児歌』（上・下）明治30（1897）9月、頌榮出版。フレーベルの家庭育児書としてヨーロッパでも注目された著作をわが国で最初に翻訳し出版した。挿絵の原画を日本の風俗絵に翻案されている。ハウの本著は全国の幼稚園保姆に愛読され、また、キリスト教保姆伝養成所の教科書としても採用されたようだ。昭和4（1929）年までに4版を重ねている。一年後の1898年、アメリカのスザン・ブロー (Blow, Susan 1843-1916) によって『The Mottoes and Commentaries of Froebel's Mother Play』が刊行された。当時アメリカでも注目された書物であることが判明する。[\* 論者の手元には大正14（1925）年の改版で昭和2（1927）年再版の米国エール大学名誉教授ラッド博士序、京都前同志社長原田助先生校閲、神戸頌榮幼稚園長ハウ女史編『フレーベル氏 人の教育』、警醒書店がある。同著には冒頭にフレーベルの写真が挿入され、続いて「フレーベル夫人よりハウ嬢に宛てたる書簡」（ハンブルク、1883年8月10日付の書簡が原文（ドイツ語）と共にその翻訳が付されている。）]

ハウは明治31（1898）年に「人間ノ教育」毛筆の和綴り本3巻を作成し、伝習所生徒の教科書として使用していたが、新たに印刷製本した。本書は「たちまち5版を重ねた」（水野浩志）。その後、世界教育名著叢書の第八巻として大正13（1924）年田制佐重訳『人間の教育』（付録「幼稚園の教育」）が刊行されるまでわが国唯一の訳書として尊重された。なお、昭和2（1927）

年には世界大思想全集49としてペスタロッチ「ゲルトロード」、フレーベル「人間の教育」、ナトルプ「哲学と教育学」、デューイ「民主主義と教育」が春秋社から刊行されるがその付録に田制佐重が「感想」を記し、ペスタロッチとフレーベルの人物を比較し、「二人は共に理論家で、フレーベルは気質上よりの理論家、ペスタロッチは必要上よりの理論家であった」と述べている。

3. ウイギン・スミス著ハウ訳『幼稚園原理と実習』大正6（1917）年、頌榮出版。

4. ブレーク著岩村清四郎訳『フレーベル伝』大正7（1918）年、頌榮出版。詳細なフレーベル伝としてはわが国最初の出版物と考えられている。ハウが一時帰米したとき発見して持ち帰り翻訳を依頼してハウが出版した。伝習所の生徒には従来ビューロー夫人の『回想のフレーベル』（1876）を翻訳して学ばせていたが、本書の出版後は伝習生の必読書となったといわれている。その他、明治36（1903）年岡山県教育会が主催して行った夏期保育講習会でハウが一週間にわたって行った講演集「保育法講義録」があるが、そこではフレーベル伝、フレーベルの保育理念・方法及びアメリカ幼稚園教育の現状が述べられている（水野浩志による記述）。

\*\* 論者が水野の記述に注目するのは水野の巖父、水野常吉著『幼稚園研究』EXP, 2002年刊行）に掲載された英文の論文である。本著は1939年に書き上げられたものであるが、付録として掲載された英文“The Kindergarten in Japan”（1908）が当時米国で紹介された唯一の日本の幼稚園に関するものだからである。次節で取り上げるロベルタ・ウォロンズも本論を引用している点を考慮すると日本の「幼稚園」の状況を知る重要な手掛かりであった。

### Ⅱ. ロベルタ・ウォロンズの論文にみるハウの思想と行動

冒頭、ロベルタ・ウォロンズ (Roberta Wollons) は自己の論文の目的を明確に表明している。すなわち、「日本政府が幼稚園という思考をどのように取り入れ、新しく形成されつつあった日本の近代化のイデオロギー論に適合するように、これを修正し、同時に日本人をキリスト教系の幼稚園から効果的に遠ざけたかを明らかに

することである。」と。極めて鋭い、社会意識を前提とする社会的な論稿である。その線上で、ハウは、「頌榮幼稚園と保姆伝習所という日米文化を混在した機関を創り出すことに成功し、宣教師の目的と日本的な文化との橋渡しをおこなった」とハウを位置付けている。

ここでは1872年の日本政府によるキリスト教禁止令の緩和に伴う状況下で、プロテスタント宣教師の数が55名にあがっていたこと、さらには宗派数においてもカトリック、バプティスト、聖公会、メソジスト、アメリカン・ホーム・ミッションや長老派を含み増加していた実態も知ることができる。その頂点として、1875年、新島襄による同志社大学の創設がある。

このような状況のなかで、1876年京都に幼びょう遊戯場開設、1877年東京女子師範学校附属幼稚園開設、さらに保育研究団体として設立されたフレーベル会の規定制定の要望を受けて、1899年文部省は、「幼稚園保育及整備規定」を公布した。だが、ウォロンズはこの文部省の「規定」にはフレーベル主義幼稚園のモデル〔恩物と遊戯による保育内容〕からの離脱が明瞭である、と指摘し、その後の法律が示す日本的道徳観が準備されていると解釈するのである。その到達点が明治23（1890）年に発布された「教育ニ関スル勅語」である。

ウォロンズは「日本固有の教育についてのイデオロギー上の論争が最高潮に達したころの1889年に頌榮幼稚園（Glory Kindergarten）は、保姆伝習所とともに、宣教師の幼稚園として、設立された。」と述べている。周知のように、頌榮幼稚園と保姆伝習所が所属していた組織はアメリカン・ボード（American Board of Commissioners for Foreign Missions, 略称 ABCFM）で、1869年神戸に設立されていた。ハウは1887年に会衆派すなわち16世紀半、英国国教会から分離した人たちが形成した各個教会の独立・自治を主張した組合教会の宣教師として来日しフレーベル主義に基づいて幼稚園を運営し幼稚園保姆の養成に挺身したのである。なかでもハウの幼稚園や保姆養成が大胆な教授法によってキリスト教徒と非キリスト教徒双方の日本人の関心と呼び全国の私立幼稚園やキリスト教系幼稚園のモデルとされたのである。またフレーベルの著作の翻訳やフレーベル論文の翻訳書は、公立学校でも広く採用される程で保姆伝習所では教材として使用された。さらに重要な事柄として日本滞在の40年間、ハウは日本や

アメリカ合衆国の幼稚園指導者達との絆を維持し、またG.スタンレー・ホール（G. Stanley Hall）などアメリカの革新的な研究者、教育運動家とも連絡を密にしていた事実である。これら開かれた視点からハウは日本の国公立の幼稚園の教育経営やカリキュラムにも深く関わるようになり、またキリスト教系幼稚園に影響力のある教派間の政治にも関与する。

さらに、ウォロンズは日本の幼稚園の文化上の、かつ教育学上の変容過程を「三つの主要なテーマ」を中心に展開している。すなわち、明治後期、キリスト教と日本の幼稚園と初等教育の基盤となった日本的道徳観の隆盛、具体的には、明治23（1890）年「教育ニ関する勅語」の発布による両者間の緊張であり、政府による教育の統合、具体的には私立小・中学校の統制と中央集権化である。そのような状況下で最後に、ハウのような個人の指導者が全幼稚園教育の基準を確立することに挺身し、成功したことになる。このような明治政府による教育の中央集権化のなかでウォロンズは、ハウの個人的資質（人格）に基づくその活動を高く評価している。

ウォロンズによれば、日本における幼稚園は、近代化のなかで明治政府による教育の統制強化のなかで「意図的に〈借用された〉教育機関として開始されたため、幼稚園の発展の歴史は、外国の教育機関が明確に日本化する過程を検討するためのモデルとなるようなケース・スタディであり、それはまた、アニー・ライオン・ハウという一人の宣教師の物語でもある」と記している。その上で、ハウは、バイリンガルで、日米両方の文化を解する使者であり、幼児期について西欧と東洋双方の価値観を採り入れた折衷型の教育機関を創ることができたとしている。同時にハウは日本に在住するアメリカ人宣教師の集団という、日本社会の外部に位置した、日本社会とは相容れない共同体に属していたにもかかわらず、日本人の多くの教育者たちから敬意を得ていた。そこにはハウの並み外れた人格や才能がうかがわれる。

私見ではあるが、ハウの諸事業の中でも最大の功績は、1906（明治39）年、在日外国人保育者の連携とキリスト教主義幼稚園の協力のため日本幼稚園連盟（Japan Kindergarten Union: J.K.U.）を設立したことである。異なる多くの

教団、宗派に属する外国人婦人宣教師を束ねることは、教団、宗派間の対立に起因するアメリカ保育界の混迷を見れば明瞭である。それはウォロンズの評価のようにハウの秀でた人格や才能にのみ起因するものなのか。個人の歴史に対する貢献といった視点から再考することも今日必要であろう。

最後に、ハウの日本における就学前教育での成功モデルの最大の要因は、フレーベルのスイスにおける就学前教育＝貧民学校の実例同様、国家の義務教育体制外の「公（立）」に対する「私（立）」の施設として宗派対立を回避した〈場（空間）〉において可能であったと思念される。同時に、わが国の幼稚園の開設に関しては、当時世界的規模で隆盛をみていた「新教育運動」の動向と関連して考察することも必要である。

## まとめ

明治9（1876）年、日本政府が導入した幼稚園制度、それはドイツでフリードリヒ・フレーベルによって1840年に創設された「キンダーガルテン（子どもの庭）」をモデルとした制度であった。

本稿は、2016年10月19日フンボルト大学付設森鷗外記念財団と同大学日本学科の共催による「子どものパラダイス」の連続講義の後期ゼミナール開講の記念講演として「1900年当時の日本におけるフレーベル主義幼稚園の受容の特徴」を、制度発足当時の主要な先駆者達の活動模様を中心に紹介したものである。フンボルト大学教育史の大家H・E・テノルト教授、大学院生で博士論文を作成中の者、幼稚園での実践家等々、全体的にレベルの高い専門家との交流であった。先方の要望もあり、先駆者達、すなわち、関信三、松野一家、アニー・L・ハウ女史の写真、更には、当時の幼稚園の活動を描いた資料二点、「幼稚園鳩巣遊戯の図」（大阪、愛珠幼稚園蔵）、「フレーベルの考案した20恩物で遊ぶ子どもたち」（関信三編著、青山堂、1875.「総説」）の二葉をパワーポイントで提示した。参加者達の関心は、「遊戯」の一斉教授の風景、更には、行儀よく「20恩物で遊ぶ（学ぶ）」図であり、その文面に書かれた行書体の意味、さらには、保姆や子ども達の着物等であった。特に注目されたのは、遊戯の図にみられる5名の外国人子どもの姿である。その際示さ

れたのが、クララ主任女史のクラス写真（二人の日本人保姆と31名の子ども達（二名の外国の子どもを含む）の写真である。外国の子どもが在籍していたのだ！その意味でも今回、東京女子師範学校附属幼稚園の在籍者名簿を徹底的に調査する課題をドイツ側から与えられた。

これらの図像や数多くの言説による明治期フレーベル主義幼稚園の受容の特徴をわれわれはどのように考えたらよいのであろうか。幼稚園に関する数多くの情報が、多様なルートを通じて紹介され、具体的な教材としての「遊具＝恩物」までが輸入された。問題の核心はそれらのフレーベル主義幼稚園に関する情報や具体的な「事物（遊具）」が当時の日本の政治・社会的状況下でどのように「土着化」し、変容したかということである。換言すれば、思想・制度と言うものは、受容する側の諸条件下で土着化し、特殊「日本化」と言う当然な事実である。問題は「土着化」する際のその国民のもつ特性を他国の状況と比較しながら、「異文化」理解の方法、異文化導入の手法を考察、吟味することではなかろうか。

論者は第4回国際フレーベルシンポジウム（2002）で「日本におけるフレーベル理解のタイプ模倣、批判、深化」のタイトルで報告した。問題は模倣、批判、深化の様態を再度〈真性なフレーベル〉から吟味、精査することである。

幼稚園発祥の地ドイツにおいてもいまなお、〈真性なフレーベル（Der authentische Fröbel）〉を求めて資料の解説がなされ、フレーベル像が探求されているのである。

## 参考・引用文献

- 1) 『文部省雑誌』, 1873 (明治6), 文部省.
- 2) 『文部省雑誌』, 第27号, 1874 (明治7).
- 3) 『文部省雑誌』, 第3号, 1875 (明治8).
- 4) 『文部省雑誌』, 第4号, 1876 (明治9).
- 5) 同上. (上記号数のうち1874年27号に注意)
- 6) 『教育雑誌』, 第24号, 1877 (明治10年).
- 7) 同上, 第29号, 1877 (明治10年).
- 8) 同上, 第48号, 1877 (明治10年).
- 9) 同上, 第55号, 1878 (明治11年).
- 10) 同上, 第58号, 1878 (明治11年).
- 11) 同上, 第84号, 1878 (明治11年).
- 12) 関信三『幼稚園記』全4巻, 文部省.
- 13) 『教育雑誌』, 第48号, 1877 (明治10年).

- 14) 『教育雑誌』, 第86号, 1878 (明治11年).
- 15) 湯川嘉津美『日本幼稚園教育成立史の研究』, 風間書房, 2001.
- 16) 石橋哲成『フレーベル教育思想の日本への受容』(増補版), 玉川学園 DTP 制作課, 2010.
- 17) A. L. ハウ『母の遊戯及び育児歌』, 頌栄幼稚園, 1942年.
- 18) 西垣光代『主に望みをおいて—アニー・L. ハウ』キリスト新聞社, 2014.
- 19) 関信三『幼稚園創立法』文部省, 1878年.
- 20) 同志社大学人文科学研究所編『来日アメリカ宣教師—アメリカン・ボード宣教師書簡の研究1869~1890—』現代資料出版, 1999.
- 21) 水野常吉『幼稚園研究』EXP.2002. (本著に復刻され, 集録されている英語による論文“The Kindergarten in Japan” (1939) が重要である)。
- 22) 日本ペスタロッチー・フレーベル学会編『増補改訂版 ペスタロッチー・フレーベル事典』玉川大学出版部, 2006.
- 23) ロベルタ・ウォロンズ論, 石井紀子訳「アニー・ライオン・ハウと宣教師による幼稚園」, 所収; 同志社大学人文科学研究所編『来日アメリカ宣教師—アメリカン・ボード宣教師書簡の研究 1869~1890—』, pp.397-421.
- [なお, Roberta Wollons はインディアナ大学歴史学科准教授でウーマンズ・スタディーズ・ディレクターで, 専門分野は教育史である。紙幅の関係から本論の詳細な引用箇所の記事は省略した。]
- 本稿は, 伝達対象がドイツ語圏の研究者・実践家であることを考慮してドイツ語による要旨を記載した。
- (本研究は, 日本学術振興会科学研究費(科研費)(基盤研究)(C), (平成27年度~29年度)による「未刊行資料の解読によるフレーベル保母養成の思想・制度・カリキュラムとその評価研究」の研究成果の報告である。)
- Anhang: Die Einführung der ausländische Literatur in der Meiji-Anfangs-Aera für die Kindergarten (vgl. Kazumi YUKAWA, “Studien zur Entstehungsgeschichte von Japanischeskindergarten“, (2001), Kazama-verlag, p.160-161.)
- (付録: 幼稚園に関する明治初期の外国文献の案内)
- \* Bewahrung im japanische Staatsbibliothek (\*印 国立国会図書館所蔵)
- ①印 Bewahrung im Universität Tukuba (= Tokyo Lehrerbildungsschule für Frauen) (①印 筑波大学中央図書館所蔵: 旧東京女子師範学校関係の資料・文献を一括所蔵している)
- \*①1. A. Douai, The Kindergarten.  
2. A. Douai, Frobel's Kindergarten Occupations for the Family.
- \*①3. W. N. Hailman, Kindergarten Culture in the Family and Kindergarten.
- \* 4. H. Hoffmann, Kindergarten Toys, and How to Use Them.
- \*①5. M. Kraus-Boelte & J. Kraus, The Kindergarten Guide.  
6. A. L. Kriege, Rhymes and Tales for the Kindergarten and Nursery.
- \*①7. M. H. Kriege, The Child, Its Nature and Relation.
- \*①8. M. H. Krige, Friedrich Fröbel (Life of Friedrich Fröbel).
- \* 9. Mrs. H. Mann & Miss. E. P. Peabody, Moral Culture of Infancy and Kindergarten Guide.
- \* 10. H. Noa, Plays for the Kindergarten.
- \* 11. J. Payne, Fröbel and the Kindergarten System of Elementary Education.
- \* 12. J. Payne, The Science and Art of Education.
- \* 13. E. P. Peabody, Education of the Kindergarten.
- \* 14. E. P. Peabody, The Nursery.
- \* 15. E. P. Peabody, Plays and Songs for the Kindergarten and Family.
- \*①16. Johannes & Bertha Ronge, A Practical Guide to the English Kindergarten.
- \*①17. E. Wiebe, The Paradise of Childhood.
- \* 18. M. E. Bailey, Hints of Introducing the Kindergarten System into English Infant Schools.
- \* 19. J. Grimm, Grimm's Fairy Tales. (1812-22)
20. E. Heewart, Music for the Kindergarten.



- \* 21. E. P. Peabody, The kindergarten Messenger.
  - \* 22. M. A. Ross, How to Train Young Eyes and Ears, Being a Manual of Object Lesson for Parents and Teacher.
  - 23. E. Shirreff, The Claim of Fröbel's System to Be Called "The New Education".
  - 24. Mrs. E. Berry & Madame Michaelis, 60 Kindergarten Songs and Games.
  - 25. (unbekannt), A Handbook for Teachers of Infant Schools.
  - 26. B. von Marenholtz-Bülow, Reminiscences of Friedrich Fröbel. Translated by Mrs. Horace Mann.
- Ohne Merkmal kommen aus pädagogische Zeitschriften vom 'MONBUSHO' u.s.w..  
 (無印は『文部省雑誌』等々の教育時報からの文献を示す)



写真① 子どものパラダイス—1900年頃の日本の子どもへの西洋のまなざし



写真② 「幼稚園鳩巢遊戯の図」(大阪, 愛珠幼稚園蔵)



写真③ クララ学級